

若者はキャリアをどう築くべきか？

—学校から職業(企業)への移行



青山学院大学客員教授 中田研一郎

なかた けんいちろう ●エム・アイ・アソシエイツ株式会社シニア・ディレクター。イノベーションズ代表。元ソニー(株)人事センター リソースマネジメント部および東アジア人事戦略部統括部長。一橋大学法学部卒業後、ソニー(株)入社。80年ソニー・アメリカ赴任(米国法務担当)、88年法務部次長、89年通商部統括部長、92年ソニー・ヨーロッパ赴任(法務・知的財産担当Director)、99年知的財産部統括部長、01年人事センター・エレクトロニクス人事戦略部統括部長を経て、04年ソニー・ニューマンキャピタル(株)執行役員。ソニーにおける人事の構造改革に着手し、人事制度全般にわたり改革を実施。採用部・研修部・人事情報システム部、Business Process Outsourcing部等の統括部長を兼務で歴任。06年4月より青山学院大学経営学部客員教授、06年5月より中国清華大学继续教育学院顧問に就任。著書に「ソニー 会社を変える採用と人事」(角川学芸出版)。

日本の企業はようやくバブル崩壊以来10年以上にわたった長いトンネルを抜け、史上最高益を出す会社が続出して急速な回復を示しています。これに呼応して大学生の就職戦線も氷河期を脱して各社とも大幅に募集人員を増加させています。就職を目指す学生にとってはありがたい変化ですが、実際に就職活動をしている学生や今から就職活動の準備をしている学生にとっては、いくら就職事情が好転したと言われても個人のレベルでは不安になり、悩んでいる人が大半ではないでしょうか。したがって、これらの学生に対し、就職活動に当たって基本的に考えておくべきことを整理し、徒に不安になって空回りすることがないようにアドバイスをしてみたいと思います。ただし、どうやら就職試験に受かるかというテクニカルなアドバイスをするわけではありません。やはり単なる表面的なテクニカルな問題というよりは、根本的にはこれから社会に出ていろんな仕事をするときに、人生いかに生きていくかという点はずして会社の業務というものもないわけですので、この一番根本的なところも含めて考える必要があります。

1 働くこととは

「働くこと」とは何でしょうか。『働くこととは、経済的に自立し、仕事の責任を負うことにより、自らのアイデンティティを確立し、社会の中に自分の居場所

を決め、社会との関わりの中で価値を創造すること』と私は定義しています。

「経済的に自立」することがまず前提となります。親のスネをずっとかじったままでは、やはり働いているとは言えません。経済的に自立というのは大事なことです。次に仕事の責任を負うことにより、自らのアイデンティティを確立する。責任を負うということとアイデンティティの確立というのは、密接な相関関係があります。責任を負わない仕事は単なる労働です。ある領域に関して自分の責任を負うことによって、自己を確立する。自分が自分であることを証明する。これがアイデンティティの確立です。

「社会の中で自分の居場所を決める」——たった1人の仕事というのはありません。社会の活動の中において仕事はあるのであって、森の奥の誰とも接触しないところで、何かを作っている——それは趣味であって仕事とは言えないのです。社会との関わりがあるから仕事なのです。

「自分の居場所を決める」——自分は何をするのだということを明確にして、人に影響を与える。人から影響を受ける。その影響関係が仕事を成り立たせるわけです。

「結果として価値創造をすること」——仕事というのはプラスの価値とマイナスの価値があります。ライ

ブドアは粉飾決算により社会から非難を受けました。企業価値を世界一にすることを目指してきたのですが、株式市場への上場が廃止になり企業価値は大幅に下がってしまいました。価値創造はやはり絶対条件ですが、悪知恵では駄目です。法律に触れるようなことというのは、当然にして価値創造にならずマイナスの価値になってしまいます。

したがって、何か自分ですることはいいが、究極はそれが社会のためにならないと仕事にはならないということです。

2 アイデンティティを確立するためのkey

「アイデンティティを確立する」ためにはどうしたらいいか。それには自己変革、わかりやすく言うと成長することです。自分というものが変わり続けていく。よい方向に変わり続けていく。これが仕事をする上で非常に大事です。会社に入って一安心ということはあり得ず、そこから自分が成長していかないと自分の満足感というものは得られません。肉体は自然に成長しますが、人間の精神や内面というものは自然には成長しません。むしろ放っておくと退化さえします。強い意志と努力、かつ思索、それを重ねて自己の内面の充実を図らないと、人間の精神は墮落します。「小人閑居して不善をなす」という言葉どおりになってしまいます。

自分の内面を鍛える方法の1つに読書があります。通勤電車の中で朝、眠そうな目で漫画本を読んでいるサラリーマンが大勢います。漫画が悪いとは言いません。漫画は立派な文化で、日本は世界に誇る漫画文化を持っています。しかし、1カ月の間で読んだ本が漫画や雑誌しかないというような状況で、果たして仕事をする上で必要な「本質を見極める目」や「論理展開力」が身に付くかという問題があります。今の時代は若い世代で本を読む習慣が弱くなりつつあります。携帯電話の画面はずっと見ているけれども、本当に内容の充実した300ページの本を本気で読んでいるのだろうか。それぐらいの本を軽々読むだけの気力と精神力と知力がなくて、会社で仕事ができるのだろうか、非常に疑問です。

1回大きな山を登った人は、小さい山は簡単に登れ

ます。小さい山しか登ったことがない人は、アルプスにはすぐには登れません。学生時代に読書の力をつけることはとても大事なことです。おそらく人生においてその力をつけることのできる限られた期間だといっても過言ではありません。

「精神の成長なくして達成はなく、達成なくして幸福なし」——精神的に自分が一生成長し続けられない限り、やはり物事の達成というのはなかなか難しいのです。また、物事を達成したことの喜び、幸福感、これがやはり仕事の醍醐味なのです。したがって、元を正せば自分が成長しない限り、なかなか仕事の充実感は得られません。自分の成長がないと、上司が悪い、会社が悪い、部下が悪い、同僚が悪いと一生言い続けて終わることになります。仕事を通して自分を知り、その知った自分の意思の反映として仕事をしていく。その仕事と自分のその循環作業の中に、人間としての成長があるのです。

仕事といっても最後は根本の人間で全部決まります。自分の人間としての土台がなければ、一見才気があり、頭がよくても5年後、10年後、必ずしも成功するとは限らない。企業活動は過酷な競争の中にありますから、軟弱な精神、人間性の中では自分が崩れてしまいます。困難な仕事に直面したときに、自分がそれに耐えられるだけの中身をつくらなければいけない。そのスタートが学生時代であり、今なのです。

アイデンティティを確立するためのもう1つのヒントは何か。それは、「仕事に困難はつきものですが、困難に直面して決して逃げないこと」です。仕事に困難がつきものとはどういうことか。困難ではないことは、仕事とは言わない。居眠りしていても楽々できるような仕事は、仕事とは言いません。すなわち、会社に入る、あるいは自分でビジネスを興し、何かやろうとしたその瞬間から困難があります。自分がやりたいと思い提案しても、そう簡単に自分のやっていることを周りの人が賛同してくれるわけではありません。アイディアはすばらしいからぜひやりたい。でも、それをしようと思ったらお金がかかる。予算が足りない。あるいはアイディアはすばらしいけれど、1カ月以内に実施しないと意味がない。しかし1カ月以内に実施できるのか、その保証はない。これらはすべて困難です。その当然にある困難に対して、自分がどういうス

タンスで仕事をするのか。これが実はその人の成長を決めます。大事なことは、仕事の困難に直面して決して逃げないことですが、これが難しいのです。

会議で何々をしようという新しい提案をします。そうすると10人ぐらいの会議ですと、10人中8人か9人からは、提案に対して様々な問題点の指摘があり、反対意見が出ます。つまり、一番簡単なことは問題点を指摘することなのです。なぜならば、仕事というのは問題点の山ですから、提案に対して問題を指摘することほど簡単なことはないからです。問題点に対して建設的な意見を述べる人は、10人に1人いたらいいほうです。10人に1人は建設的な意見を述べて、残りの9人は、様々な問題点を並べたてる。では、その違いは何なのか。その人の性格なのか、頭の良し悪しなのか。それはその人の心の姿勢なのです。問題点の指摘も大事ですが、それに終始する人は成長しません。誰が何と言おうと、これはこうすればできるという発想を持ってチャレンジする人が成長します。「逃げないということは困難にチャレンジをし続けること」です。十中八九できないかもしれない、でもやってみよう。しかも、チャレンジを継続することが大事です。少しチャレンジしてすぐに諦めてはチャレンジしたことにならない。「継続は力なり」とは徹してチャレンジを続けるということです。その精神の中に実は成長というものがあるわけです。逃げていないか、逃げていないかということは他人には見えません。でも、自分の胸に問うてみれば、自分にはわかっています。難しいほうを選ぶ、易しいほうはやらない。これはとても難しいことですが、これに挑戦する人が結果として成長します。

大事なことは、自分が実行すること、コミットメントした内容について、自分は全責任を負って人のせいにしない。何事かをする決めたら、役割分担とかいろいろありますが、最終的には、誰が何と言おうとやってしまう。結果を出す。結果が出るまでしつこく粘る。これが大事なことです。それをするとならないでは何が違うか。上司は部下を持つと、「この人は成長するな、この人は成長しないな」ということが、一緒に仕事をしてみるとわかってきます。結論としては逃げる人は使えません。なぜ、使えないか。逃げる人は結局仕事ができないからです。上司は本当に任せた仕事を責任持ってやってくれる人を使います。自然にそうい

う人には仕事が集中していきます。結果、信頼感が高まり、よって、その人はどんどん成長していきます。

逆もまた真です。逃げる人、要領よく立ち回る人、こういう人には上司は大事な仕事を任せません。なぜならば、その人が仕事をした振りをして、仕事の期限がきても、よく見てみると、実は手抜きがある。そうするとその結果は全部上司にはね返ってきます。そういう人を使うと上司は突然結果責任をとらなければいけない。したがって、そういう人には重要な仕事は出しません。重要な仕事を依頼されない人は成長するチャンス逃すのです。

それを30年間やってしまうとどうなるか。やっぱりそういう人はリストラ対象になる可能性が高くなります。大事なことは若いときから自分に任された責任、あるいは自分が自ら進んでやりたいと言ったことを徹底的に食らいついてやることです。それでは必ず成功するかといえば、成功しないほうが多いのです。仕事とはそもそも困難なのだから、五分五分か、七対三で失敗するかもしれない。でもそれでいいのです。なぜならば、結果として成功しなくても、そのようなチャレンジをする人は、周りの人の信頼を勝ち得て、自分を応援してくれる良い人が身の周りに集まってきます。仮に良い結果が出なくても、失敗が成功の次の原因をつくる。逆に「口だけで、言うけれどやらない人だ」という評価をされている人は結果を出せません。

なぜそうなるかという、仮に100を狙ったものが30ぐらいで終わったとしても、誰が何をしているか、人間は自分のことはわからなくても人のことはわかるからです。「あの困難な中でたった1人頑張っている、やっぱりあの人はよくやっている」ということが本人は言わなくても人に伝わるのです。そうすると、「あの人をちょっと応援してあげようかな」と思うのが人間なのです。いろんな人のサポートがない限り仕事は達成できません。特に企業の組織においては、たった1人で仕事をすることはあり得ないのです。どんなプロジェクトでも5人、10人の人の協力が必要です。大勢の人の意見を集約して一定の方向に引っぱっていくには、信頼関係を築かなければできません。役職が上だからといって人はついてきません。命令では人は動かないのです。何についてくるのか。それはそのリーダーを見て、あの人の言っていることは正しい、あの

人を応援しようと思うから人はついていくのです。

会社に入って課長とか部長になって、ああこれで良かったと思ったら大間違いです。そこからが大変なのです。部下を引っばっていきけるか。おだてたからといって人は動くものではありません。その人の人間性でしか動かないのです。だから、若いときから人の批判と評論家ばかりしてきた人は、上司になったときにも自分のことは棚に上げて部下の批判ばかりしてしまう。しかし部下を批判しても始まりません。部下をどうやって引っばっていくか、中身が問われるのです。その時に、若いころから自分で全責任を持ってアイデンティティを確立した人には、人はついてくるのです。なぜか。いい人が周りに集まり応援したくなるのです。そうすると、何か仕事をしようとするときに、会社の中に、良い人脈ができます。飲み屋で仲良くすれば人脈になると考えるのは勘違いです。馴れ合いの人脈では仕事の困難に直面して、一緒になってリスクを負うようなことはできません。

逆に要領よく困難を避けて立ち回り、仕事をした振りをするような人は同じことを繰り返します。部下に仕事を依頼すると、困難を避けて仕事をした振りをする人がいます。大変多いのです。わからないと思うかもしれませんが、上司には全部見えてしまうものなのです。ですから、仕事をするときに、自分が何かつまらない仕事をやっているなと思ったら、原因をほかに求めては駄目です。原因はすべて自分にある。それが自分のアイデンティティを確立する上で一番大事なことです。環境と自分、どちらが原因か。環境が悪いから自分が駄目なのか。自分が駄目なのは誰のせいなのか、自分のせいなのです。つまらない仕事をしていたら、つまらない仕事しかもらえない自分が問題なのです。自分にはそんな能力はないと思って逃げる人が多いです。しかし自分でそう決めつけたら事態は開けません。心がけて人間はいくらでも成長できます。頭の良し悪しなんて紙一重です。大学に入るときはペーパーテストの偏差値で序列が決まります。会社に入ったらそのような偏差値はありません。その人がどういう姿勢で仕事をして、具体的にどういうアウトプットを出せるか。それがその人の会社における偏差値なのです。結果として頭は悪いよりは良いほうがいいのですが、頭がよければ仕事できるかというとは必ずしもそ

うではありません。頭の良い人は要領よく仕事をするけれども、逃げるのが上手な人も多いのです。だから、頭が良ければ信頼されるかということ、それほど物事は単純ではありません。入社3年目ぐらいまではそれでいいかもしれませんが、本当に自分が責任を持って仕事をするときには、仕事というのは人物によって動いていくのです。

要領よく立ち回って、上司にわからないように仕事をした振りをしておく、それを本質にした人というのは、結局責任逃れを常にしているわけですから、その責任逃れが人の信頼感を失わせ、結果として負けます。それを繰り返すと負け癖になります。負けると腐ります。ネガティブスパイラルに入ります。そうすると愚痴の人生になります。愚痴の人生に難しい定義はいりません。常に人と組織の悪口を言っている人がいますが、それが愚痴の人生です。すべて自分以外が悪く、自分だけが正しいということを口に出さないと精神のバランスがとれないのです。そうになってしまうと会社で楽しいことは何もなくなります。

3 社会で求められている能力

「社会で求められている能力」とは、「アイデンティティを確立してセルフマネジメントのできる人間として、不確実な状況でリスクテイクし、目標にコミットし、挑戦するプロセスに、自分だけではなく、人を巻き込んで動かせること」ということになります。セルフマネジメント、つまり自分を自分でコントロールし、人に依存しない。自分が自分の足で立って、他人に依存しない。組織に依存しない。自分が自分で立つ、これがセルフマネジメントできる人間で、今の会社の人事においてはこのセルフマネジメント型の自立した人材像が強く提唱されています。

ですから、自分のアイデンティティを確立し、自分が自分という車のドライバーズシートに座ってハンドルを持つ、これが大事なのです。ことが順調に進まないと、他人や環境のせいにしたくなりますが、他人は関係なく自分の問題として受け止めることが大事なのです。

なぜリスクテイクすることが条件なのかは、リスクテイクの逆の前例主義を考えるとよくわかります。

役所の窓口に行くと前例がないから駄目だと断られることがよくあります。役所に限らず、会社においても前例主義で反対されることがよくあります。新しいことに反対する一番簡単な方法は、前例がないと指摘することです。前例がないからと反対をするのなら、それは資本主義ではなくなってしまいます。

民間の利益を追求する組織においては、すべてリスクを取ってチャレンジするところに利益の源泉があります。技術、商品、サービス、何であれ、リスクを取らない限りマーケットの競争には勝てません。リスクを取って変化を作っていく。その変化のダイナミックレンジが大きいほど、成功すればその利益も大きくなる。創業者利益として最初にやった人が一番利益をたくさん取る。イノベーションを先にやった人が一番利益を勝ち取る。イノベティブな人間がイノベーションを起こすのです。保守的な人間がイノベーションを起こしたことは、あまりありません。どういう人がイノベーションを起こせるか。それは前述の「自分のアイデンティティを確立した人」だけです。

そういうセルフマネジメントのできる人間を信頼感によって結びつけられる人が、リーダーです。リーダーの一番大事な仕事は、その組織を構成する人間をいかに信頼感で結びつけられるかということです。リーダーによりその組織の団結力は決まります。100人の組織があっても、心がバラバラでは物事は達成できません。たとえ半分の50人であっても、信頼感で結びつけられた組織は強力です。それを担うのは組織の責任者であるリーダーです。リーダーが悪いと組織は駄目になります。どんな優秀な人間を集めても、資格要件を充たさないような人が組織のリーダーになると、その組織はいずれ衰退をしていきます。組織の根本は信頼感です。組織の構成員がお互いに信用できる、尊敬できる、そういう組織が一番強いのです。1人ひとりが依存関係ではなくて、自立しセルフマネジメントできる人間から構成された組織は最強力なのです。

4 これからの大学生のあるべき姿

これから就職活動する大学生に対して、次の言葉を送りたいと思います。

You can fit yourself to the work by FIT.

FITのFとはFreedom、IとはIntelligence、TとはTime。

学生時代に学生は3つの大きな財産を持っています。それは自由・頭脳・時間です。ポケットにどんなにお金がなくとも、学生はこの財産を使い活用する機会を持っています。学生は実は財産家なのです。しかし、この財産は1つの大きな特徴を持っています。タイマー付きなのです。今が大学3年生あるいは修士課程の1年ならあと1年弱でTime is upなのです。そうするとこの自由と頭脳と時間の中身が完全に変わります。

まず自由は社会に出ると何が起こるか。社会というのはルールとしがらみがあります。ルールとしがらみのない仕事、社会、組織は存在しません。社会に出るということは、不自由な世界に入ることです。

しかし、不自由すなわち不幸ではない。それは、自分次第なのです。不自由な世界において、いかにして自分で自由な世界をつくっていくか。これはひとえに自分の仕事の実力にかかっているのです。仕事の実力のある人は、自分でコントロールできる部分がたくさん増えていきます。逆に仕事の実力がない人は、人からコントロールされる部分がどんどん増えていきます。そのときに不自由の度合いが大きい人は楽しくないわけです。やはり、仕事をする以上は自分の考え、自分のアイディア、自分がやりたいことをしていくことが楽しいことであり、やり甲斐であり、達成感です。100の仕事のうち100を人の命令とコントロール下で仕事をしたときは、自分の充実感は限りなく希薄になります。新入社員は仕事の力がまだ十分にありませんから、大きな不自由からスタートしていきます。その中でいかにして自分の自由度を高めていくかが課題なのです。

仕事の自由度を高めると、仕事は大変面白くなります。どんどんチャレンジをしていく。チャレンジのハードルが最初は低い。陸上競技の高飛びでバーをだいたい5センチか10センチ上げていきます。5センチといえばほんのわずかですが、これをクリアできるかどうか、結構きわどい。仕事も同じです。いきなり2メートルを超えるような跳躍ができるかといえば、それはできない。

ではどうするか。仕事というのは自分1人でできるものではありません。そうすると仲間が必要、協力が必要です。どうやって得られるか。それは同僚・上司、あるいは部下が自分を信頼してくれるから仲間ができるのです。逆はどうでしょう。「彼の言うことはちょっと信用できないから話半分に聞いておこう」ということになる、その人は仲間の協力は得られません。同じ仕事を2人でやり、3人でやるのと、1人でやるのとは、スピードも完成度も異なります。人の協力を得られない仕事というのは、必然的に質も悪く、時間もかかりいろんな面でネガティブになります。

ではどうすれば人の信頼を得られるか。そうするとまた議論が循環して、自分がどんな人間かによって決まる。だから人のせいにできない。自分のことを信頼してくれないときに誰のせいなのか。信頼しない相手が悪いのか、信頼されない自分が悪いのか、答えは明らかです。自分なのです。自分のアイデンティティを確立して、セルフマネジメントできる人間になったとき、必ず援軍があり、友軍があり、サポーターがあります。そのときにチームで仕事をしたときには、非常にダイナミックな活動ができます。人間すべてオールラウンドプレイヤーで何でもできるという人はいません。例えば自分はアイディアマンだが、実行プランをなかなかつぐれない。逆にプランをつくるのは上手だけれどアイディアはあまり出せない。プランもつぐれないけど、馬車馬のような馬力があって、最後やるというときには一気に走れる、こういういろんなタイプがいます。

プロジェクトにおいては、PDCAサイクルといってplan、do、check、actionを回していくことが必要です。かつ、それは1人ではなくてチームを編成して行うので、前述のバーが少しずつ高くなって3人プロジェクト、10人プロジェクト、30人プロジェクト、50人プロジェクト、100人プロジェクト、1,000人プロジェクトなど、どこまでバーを上げることができるかが問われます。100人のプロジェクトと10人のプロジェクトでは、難易度が全く違います。難しいプロジェクトを成功すると達成感は大きいものです。プロジェクトの達成感は偉くなることを目的として得られるものではありません。結果としてそういうプロジェクトを本当に回すことができる人間は、そうそういるものでは

ありません。その会社にとってのその人材は、極めて重要な人材であり、簡単にできない仕事をする希少価値の人材です。

地位とか名誉とかお金は追うものではなく、後ろからついてくるものです。地位と名誉とお金を追いかけている人は、陽炎のようにお金も逃げていく。地位も逃げていく。社内の派閥騒動を見て、あの派閥にくっついていけば偉くなれるのではないかというのは陽炎を追っていることになります。自分の中身が何もないのに地位を追っている。それでうまくいって社内ポリテクスの中を生き残り、高い地位を得ることがあるかもしれない。しかし、誰がその人に本音でついていくでしょうか。あの人はいろんな人におべっかを売って、派閥の仕組みの中であのポジションを得たということは、全員がわかっています。誰もそういう人を尊敬しません。たとえ役員になったとしても楽しくないでしょう。自分の胸の内では、自分が役員になったのはなぜかがわかっています。自分の実力で役員になったわけではないということは、誰から言われなくても自分でわかっています。そうすると楽しくないのです。仕事をし、働くということの意味は、結局自分が自立して価値創造することにありますから、正道、王道を歩まなければいけない。邪道や霸道では駄目です。邪道で一時の繁栄、一時の成功はおさめても、長い時間、かつ自分の本当の心の充実というものは得られません。

したがって、学生時代にある自由と時間と頭脳をフルに活動させて、目指すべきは自己確立、アイデンティティの確立ということが大事なのです。学生は、自分の持つ自由を存分に楽しんで、今の時間に寸暇を惜しんで学び行動をしていただきたい。

頭脳は若い時代に鍛えておかないと、歳とともに急速に衰退します。これは生理学的に人間の頭脳のピークは18歳ぐらいと言われており、毎日脳細胞は死滅していきます。しかし、それに比例して能力が落ちるかということ人によります。若いときに、前述の本格的な本をしっかりと読んだ人は大丈夫ですが、それをしていない人は、衰退のスピードはとても速いのです。脳というのは鍛えておかないと駄目になるのです。若いときに鍛えておかないと40歳ぐらいで一念発起して

何かやろうとしても、もう脳細胞はもたないのです。今の時代はインターネットの検索エンジンを使ってどんなことでも瞬時にして答えを探ることができるようにみえます。しかしそれだけに終始していると、思索という一番大事な思考プロセスがコンピュータに代行されてしまうので自分の思索力は一方向に深まりません。知識を知恵に転化させる脳の回路が形成されないのです。検索エンジンの便利さは思索力の劣化というリスクを増大させていることを自覚しておく必要があります。

若い時代に脳をどれだけ鍛えるか、それは時間との競争です。

時間は二度と戻らない。学生時代というのは、インプットの時代。会社というのは、アウトプットの時です。十分なインプットがなければアウトプットも限られます。だからこそ大学時代の有り余る時間を有効に使って学ばなければいけない。何を学ぶのかといえば、基礎、原理、原則を学ぶのです。学問とは何かと言えば、原理、原則、物事の根本を理解するということです。それを理解すると応用することができるようになります。

これはスポーツでも何でもそうですが、基礎がなく突然すばらしいことができるということは世の中に存在しません。学問というのは、最初はそんな面白いものではないのです。なぜならば、自分の知識が不十分なため、面白いと感じられるレベルに達するのにとても時間がかかるからです。学生が、いろんな授業に出ても授業がつまらないと思うことが多いと思います。それはどうしてかという、自分の知識や思考のレベルが低いからです。自分のレベルが高いと、つまらなそうな話をしている教授の話も面白く感じられるのです。自分のレベルによって面白いか面白くないかは決まるのです。自分が知識豊富であり、その領域で、あるレベルに達していれば、非常にその授業は面白くなります。

社会に出たときに自分に問題意識、課題意識が芽生えたうえで学問をもう一度すると、学問というのは限りなく面白いものなのです。それがMBAで学ぶ意味でもあります。経済の基本がわかれば、新聞を読んでも面白くなり、また、経済の動きに関して自分の考え

を持つことができるようになります。

学問は厳と存在し、大学で教えている教授はその道で高いレベルを達成している人です。ですから、講義を面白くするためには、最初は一見面白くなさそうな本でも頑張って読む、これしかないのです。学問に王道はないと昔から言われていますが、徹してやれば面白くなるのです。

最後に、出典がわからないのですが、昔、私が手帳に書き留めていた次の言葉を送ります。

Do not lament your yesterday.

Life is in you today.

And you forge your future.

「過去を悔いることなかれ、人生は、ただ今にあり。明日の自己を鍛えよ」というような意味です。中国ではそれを何と言っているか。「機不可失。時不再来—機失うべからず、時ふたたび来たらず」(北宋旧五代史)

今、大学で学んでいる、この瞬間しか皆さんは生きている時はない。今の瞬間に何をしているかが未来を決する。それをよく理解して、何をすべきか考えるだけではなくて、行動することが大事です。行動の中に自分というものが見えてきます。一番見えないのが自分です。自分の背中は見えない。自分を知りたかったら、行動してみたらわかります。アクションに対してはリアクションがあります。リアクションは自分の影です。でも、大事なことは明日に向かって撃って出なければいけないということです。過去を振り返って悔いても何の意味もありません。明日に向かって行動していくことが大事です。

ある諺に、「太陽に向かって歩けば影はあなたの後ろに行く」と。逆をやっては駄目なのです。太陽に背を向けて歩いたら、影だけを見て歩くことになる。希望がない。皆さんは若いのだから、希望に燃えて情熱を持って太陽に向かって歩く。これがforge your futureということです。